

〈特別寄稿〉

民話の語りの場から

稲垣 勇 一

民話を語るという立場から、方言について考えてみる。

方言は、いうまでもなく、それが使われる土地の風土と、その風土に包まれて暮らす人々の感性が生み、育て、そこで磨かれてきた、基本的には話しことばである。従って、その生まれた土地の日常会話のなかでこそ、方言は生き生きとその表現力を発揮し輝く。書きことばと異なり、方言はきわめて感性的五感的具体的で、土地と密接に結びついたことばといえる。

例えば「しばれる」という寒さの状況を示す北の方言がある。上田地方の寒さが今年のようにどんなに厳しくとも、「しばれる」は上田には似つかわしくない。共通語ではあってもやはり「冷え込む」とか、方言的ニュアンスを出すとするれば「うんとさびい」とでもいわねば、土地の物語にはなっていない。

方言で民話を語ることが難しい時代に来ている、とよくいわれる。そんな話題が出るときはいつでもそうだが、安易に方言らしきことばを使って、それを民話の語りとするものが、一方で横行しているという実態がある。なかには「なにをちまちまそんなことを」と、ぐいぐいと方言で押しまくるみごとな語り手もいて、その力に圧倒されることもある。しかし、それがどうしたといわれそうな気もするが、物語のイメージが欠落する部分があることも確かだ。それはそれとして、日本人の日常がどこもかしこも似通い、風土と暮らしの個性は失われていく一方である。また人々が奇妙に孤立化し、環境もふくめて他者との関わりの密度がこれほど薄められた時代もそう多くない。「かわいい」ということばひとつで、関わりの粗方が了解されてしまう時代である。もともと生活者の感性は残酷で、関心のないもの、無縁と感じるものは、容赦

なく切り捨てていく。そこに心の傷みなどは毛頭ない。ことは方言ばかりではないのだが、それが無意識無自覚であるだけに、時にいっそうの怖さを感じないでもない。

一方、いま方言のひとつの流れに、何気ない会話のユーモラスな味付けとしての使われ方がある。当然それは風土や暮らしの実態とは無関係で、方言はその場限りに浪費される。土地ことばとしての特性は無視され、どこの方言かなど話題になっても差し当り大した問題ではない。(過去、方言が軽蔑や差別の対象になったことと比べれば、時代ははるかに進んでいるのだが……。)

ことは実はそれだけではないのだが、そんな時代に方言が地域語として関心が持たれ、風土と暮らしとの関わりのなかで味わい深く語られることに、さて、語り手も聞き手もどれほど心を寄り添わせているのか。方言で民話を語ることの難しさのひとつがそこにある。結論を急ぐが、先ずは語り手である。方言風ことばで何気なく語ってはならない。何より方言に込められた先人の感性の深さに心をときめかせ、敬意を持つことから総ては始まる。

(塩田平民話研究所)